



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第554号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第554号. 京大東アジアセンターニューズレター 2015, 554

ISSUE DATE:

2015-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196332>

RIGHT:

2015 年 1 月 25 日発行 第 554 号

CONTENTS

アジア経済発展論研究会のご案内	2
読後雑感：2015 年 第 3 回	3
上海街角インタビュー ⑭	12
【中国経済最新統計】	16



アジア経済発展論研究会のご案内

1月の研究会を1月29日（木）に開催致します。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

研究会 website : <http://www.cseas.kyotou.ac.jp/~fmieno/Asia%20Economic%20Seminar.html>

アジア経済発展論研究会

（経済学研究科、東南アジア研究所、アジア研究教育ユニット共催）

■1月定例研究会

2014年1月29日（木）17:00—18:30

場所：吉田中央構内 法経東館 B1 「みずほホール」（下記地図5番のビル）

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r_y.htm

報告者：武田 友加 氏（九州大学 経済学研究院 准教授）

報告論題："Garden plots as an informal safety net in rural Russia: Their role in recovery from income shocks and a quasi-social policy"

要旨：

By using micro data from the Russian Household Budget Survey of 2004 and 2009, this study analyzes whether food production on garden plots (or, personal subsidiary husbandry), a traditional activity in rural Russia, functions as a safety net for rural households in the event of an income shock. The empirical results reveal that poor rural households are more active in assuring the food security function of their garden plots in the event of an income shock. This demonstrates that production on garden plots could help rural households buttress against an income shock and help poor rural households, in particular, escape poverty. The study concluded that production on garden plots could play a role of a quasi-social policy for the poor rural households under the situation of a malfunction in the formal social policy.

言語：日本語或いは英語（未定）

研究会幹事：

東南アジア研究所 三重野 mieno-lab@cseas.kyoto-u.ac.jp 075-753-7311

経済学研究科 矢野

経済学研究科 高野

経済学研究科 Souksavan Vixathep

読後雑感：2015年 第3回

23. JAN. 15

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

1. 「理不尽な進化」
2. 「人間の目利き」
3. 「セクトの宗教社会学」
4. 「認知症の“真実”」
5. 「病気を治せない医者」

1. 「理不尽な進化」 吉川浩満著 朝日出版社 2014年10月31日

副題：「遺伝子と運のあいだ」

帯の言葉：「99.9%の生物種が消える？ “絶滅” から生命の歴史を眺める！ この世は公平な場所ではない？」

この本はおもしろい。進化論という自然科学のテーマを扱っているが、内実は哲学書である。若干、回りくどいようにも感じるが、この本は常識という概念で固まり切ってしまっているわれわれの頭の、固い殻をぶち破る役割を果たす。

吉川氏は、歴史的に見るならば、99.9%の生物種が絶滅しており、その理由は、「遺伝子と運の複雑な組み合わせによる理不尽なものである」という。つまり、すべてが運によって決定されるという「運命論」でもなく、すべては努力と能力によって決まるなどという「根性論」でもないといい、「“生物は運が悪いせいで絶滅する” と言うとき、ラウプはたんに運が大事だと指摘しているのではない。それだけでなく、生物の歴史における運の独特な働き方に目を向けるように促しているのである。そうすることで、恐竜や哺乳類の理不尽な絶滅と生存の事例で見たように、遺伝子を競うゲームが運によってもたらされる事態、二重の不運と二重の幸運、公正なルールの不公正な導入、公平な運の不公平な適用といった、生物の存在を左右する微妙で複雑な運の働き方を確認することができる」と書いている。

さらに吉川氏は、「理不尽な絶滅は、弾幕の戦場のもとでの運の支配と遺伝子を競う公正なゲームの支配とが組み合わせされたシナリオである。そうだと

すれば、このシナリオによって滅んだ恐竜は運も遺伝子も悪かったということになるのだろうか。一瞬そのように考えそうだが、実はそうではない。理不尽な絶滅の犠牲者は、つまり恐竜は、むしろ2重に運が悪かったというべきである。遺伝子を競うゲームの土俵自体が、運によって入れ替えられてしまうということ、それがこのシナリオの要点だからだ。恐竜はまず、たまたま起きた天体衝突のときに、たまたま繁栄を迎えていたという点で、運が悪かった。さらにふたまわり目の不運が恐竜を襲う。たまたまもたらされた衝突の冬が、たまたま自分にとって徹底的に不利な環境であったというものだ。彼らはそこで、これまで自分の影に隠れて生きてきたような小物たちが生き延びるのを横目で見ながら滅んでいったのである。理不尽な絶滅の犠牲者は、必ずこのようにして2重の不運に見舞われる。これを理不尽と呼ばずしてなんと呼ぼう」と、わかりやすく書いている。

その上で吉川氏は、「プレーヤーの能力や実績とは無関係に新しいルールが導入される結果、成功をもたらしている。長所がそのまま致命的な欠陥に転じたり、欠陥であるものが思いがけず長所に転じたりもする。理不尽な絶滅とは、そのようにして起きる絶滅のシナリオである」と書いている。そして、「進化論の根幹をなす自然淘汰説の考えを、私たちは常識として基本的に受け入れている。そしてこの常識が想定する進化の舞台は、競争と闘争を通じた優勝劣敗の掟が支配する能力主義の世界だ。それは運や理不尽さといった不確実性とはやはり相容れないように思われる。生物の存亡が運や理不尽さに左右されているのだとしたら、誰が生き残るべきかを決める優劣の基準そのものが無効になってしまうのではないか。理不尽な絶滅の本質的特徴は、生物の存亡はその能力の優劣さには還元できないという点にあるのだから」と書き、その模範回答として、「自然淘汰も理不尽な絶滅どちらも正しい」と書いている。

吉川氏は、自然淘汰説に関するわれわれの理解が間違っていると指摘し、「自然淘汰は弱肉強食で優勝劣敗でもない」、「強い者が生き残るのではなく、適応した者が生き残る」、「適応したものは結果として生き残り子孫を残す者のことである」、「私たちは自然淘汰の意味をおおざっぱにはあれたしかに理解できるはずなのに、それにもかかわらず、ことあるごとに**適者を強者や優者と取り違える**。また、過去の勝者や敗者があらかじめ決まっていたかのように語るし、未来の勝者や敗者があらかじめ決まっているかのように語る」と書いている。さらに、適応について、「あくまで結果として生き残り、子孫を残す者を指す」と主張している。

吉川氏は、「ゴーギャンは妻子を捨ててタヒチに渡ったが、そこで多くの優れた絵を描き、人々に認められることになった。家族を捨ててまでして芸術に賭けた彼の勇気ある行動を、後世の私たちは立派なものとしみなして称賛する。しかし、もし彼が成功しなかったらどうだろうか。ただの人間のクズだろう。ここでは道徳的な善悪が事後的な回顧にもとづいて決定されている」と書き、道徳的判断でも偶然的な結果に左右されると書いている。そう言われれば、仏教を生んだ釈迦の行動も同様に考えることが可能である。あくまでも大事なことは結果なのであり、それは偶然に大きく左右される。

従来から私は、「わが社の中国での事業の成功は、天運によるところが大きい」と言ってきた。わが社が中国に進出した時期は、ちょうど業界を取り巻くルールが大きく変わるタイミングであり、それに適応できたことが、最大の理由だからである。そして結果として、現在、生き残っているからである。さらにまた、現在、既存のルールが大きく変わりつつある。そこでは今までの長所が短所になる可能性がある。わが社にも「理不尽な絶滅」に勝つために、さらなるモデルチェンジが必要とされているのである。そして今回もまた、結果として生き残ることが、大事なのである。

2. 「人間の目利き」 吉村作治・曾野綾子共著 講談社 2014年12月8日

副題：「アラブから学ぶ“人生の読み手”になる方法」

帯の言葉：「強く、賢く、疑い深く、したたかに。 アラブの知恵で日本は復活する」

この本は、吉村作治氏と曾野綾子氏の対談であり、「アラブやイスラムのことをわかりやすく書いた本を出しましょう」という目的で出版された。エジプト考古学者であり、元妻がエジプト人イスラム教徒である吉村氏と、キリスト教徒ではあるが、アラブ・アフリカ社会に通暁している曾野氏のこの対談企画は、「イスラム国」が注目を集めているときだけに、タイムリーではある。それを意識してか、この本は冒頭から「イスラム国」の話題を持ち出し、「アラブ人は“イスラム国”が嫌い」、「就職先がないから、食べるため、金のために兵士になるということはある得ます。私の推測するところでは、イスラム国のまかないが悪くなると逃げ出すと思う」（曾野）、「最初は日給300ドルとすごくいい条件なんです。だから世界から志願兵がたくさんやって来る。でも来たら麻薬でぐちゃぐちゃにしちゃって言うことを聞かせるようにするから、お金なんてどうでもよくなっちゃう。イスラム国の月収が1億ドル。今は、イラクとシリアで奪い取った油田の原油やガソリンを売って儲けてる。それから偽札造り。文化財の密売までやっている。遺跡をほじくり返してどんどん安売りしてるんです。とんでもない話ですよ」（吉村）、

「僕は、イスラム国は金の切れ目が縁の切れ目になるだろうと思っているんですけど、爆撃されて外に出た連中が各地に散らばって、宣伝や勧誘活動を始めると怖いですよ」（吉村）と両者に話させている。

両氏は、「イスラム教徒が実践すべき 5 つの行いのうち、4 番目にあげられているのが喜捨です」と言い、それを好意的に評価している。私はそれに反対するわけではないが、バングラデシュのイスラム教徒は一般に、喜捨を受けることに慣れてしまい、自助努力を行うことを放棄してしまっていることが多い。危機に瀕しても、きっと誰かが助けてくれると信じており、自らそれに備えをすることを怠る。したがって貯金するという考えは希薄であり、「宵越しの金は持たない」というような気持ちで、その日暮らしの人が多い。この「喜捨の教え」には、私は人間から自助努力の精神や向上心をなくしてしまうような、否定的面もあるということを考慮しておいたほうがよいと思う。

両氏の対談はおもしろく、アラブ社会を理解する参考にはなるが、国際社会が当面している「イスラム国」問題を解明するには、ほど遠い。以下に、参考個所を列記しておく。

- ・イスラムは戦闘的な宗教だと決めつける人が多いのですが、これは迫害された場合のみ、言い換えれば迫害されたときしか戦ってはいけない、ということです。自分の考えに反する人は殺してしまえ、というものでは決してありません。アッラーの道を説くイスラム教徒の行く手をはばみ、その理想社会の実現を弾圧する者、イスラム教徒を迫害する者こそがジハードの敵なんです（吉村）。
- ・アラブでは年寄りには財産なんですね。なぜなら、たくさんの経験を持っているから。わからないことは年寄りに聞けば、でも教えてくれる。だから財産、宝なんです（吉村）。アラブの格言に「一家に老人がいなければ、ひとり買ってこい」というのがありました（曾野）。
- ・アラブ人には、単なる親切心だけでなく、裏に仕返しされるんじゃないかという危惧がある。いいことをすれば喜ばれるということと、悪いことをすると報復されるということが、裏腹にくっついているんですよ（吉村）。
- ・運・不運といのは間違いなくあるでしょう。否定しても否定しなくても運命は確かにあるんだから、肯定したほうがいい（吉村）。
- ・イスラムの教義をきちんと理解している人は、運命には幅があって、努力をしない人間は下の方の運命、一生懸命努力した人は上の運命を与えられる、と考えているんです（吉村）。
- ・自分の才能で偉くなったとか、自分の力量で金持ちになったと本気で考えているのは、アメリカ人と日本人ぐらいじゃないですか。よく日本のテレビ

番組に成功者が出てきて、自力で成功したみたいなことを話しているでしょう。でもよくよく聞いてみると、どこかでとんでもない大儲けをしたり、思いがけなく人に出会って助けてもらったりしている。本人は自分の能力で富や名誉や地位を築いたと思っているけれど、実は偶然の産物なんですよ（吉村）。

・イスラムでは、人間は生まれたときから平等じゃないと、わかっている。ばらつきがあるからこそ、神様が平等に恩恵を与えるわけです。ただし、本人がそれを受け止めて努力しないと目的を果たすことはできない。それもわかっているから、必死で努力する人たちがいるわけです。

・アッラーは、酒が美味で、それに酔う気持ちがどれほどいいかわかっているけれど、現世では、酔って人に迷惑をかけたり、争いを起こしたり、あるいは酒に溺れる者がいるので飲酒を禁止した、と言います（吉村）。

・イスラム教徒は豚肉を食べることを禁じられていますが、これも「コーラン」に書かれているからです。はっきりした理由はわかりません（吉村）。

・我欲のままに生きている特権階級の人々は、地獄へ落とされる見本みたいなもの。天国へ導かれる敬虔な者というのは、欲望を抑えて耐え忍ぶ人間のことでした。不平等な社会に耐えて生きることを強いられている多くのアラブ人にとって、これほど魅力のある教えはなかった。今、世界のイスラム教徒は16億人近くいると言われていますが、イスラム人口が増加している理由の一つは、格差による不幸を実感する人が増えたからでしょう。アッラーの神の前ではだれしも平等です。どんな人でも現世で善行を重ねていけば、天国での至福が約束されるのです（吉村）。

・エジプトでは、民主主義は人間を墮落させるから、いい独裁者が出てくるのを待つしかないという意見が少なくない。独裁主義の一番陥りやすい問題点は腐敗ですが、腐敗しない独裁があれば一番いい、と言うんです（吉村）。

3. 「セクトの宗教社会学」 ナタリ・リュカ著 伊達聖伸訳 白水社 2014年11月10日

帯の言葉：「キリスト教からオウム真理教まで広範囲を網羅」

この本は、難解ではあるが、示唆に富んでいる。著者のナタリ氏は、「セクトという言葉は、こんにちでは完全にネガティブな意味で使われるが、まったく別の運命をたどったかもしれないものだ」と書き、「セクトについてあるひとつの定義を与えることを控えている」、「複雑なセクト現象にアプローチするひとつの視点を提供することであった」と述べている。

ナタリ氏は、西欧の宗教改革や日本の鎌倉新仏教運動、ユダヤ教の分裂、

イスラム教の分裂を捉えて、「自分たちは人類の歴史の最後の段階にいるという意識が、宗教的要求の変革の重要な要因となるのはどこでも同じである」と主張している。

またナタリ氏は、ヒンドゥーナショナリズムの勃興についても、「イギリスの植民地支配と少数派であるムスリムの汎イスラム主義が、土着文化の純粹性を脅かすものと受け止められたのである。ヒンドゥーナショナリストは、この外来の脅威と戦うために、ヒンドゥーの伝統的象徴を再解釈して再び自分のものとし、侵入者がもたらした文化に対抗しようとして攻撃の姿勢を強める」、「ヒンドゥー教徒の一部に、自分たちは被害者であるという感覚を目覚めさせ、さらには激しい劣等感のコンプレックスを抱かせた」からであると書いている。

西欧人の東洋文化への傾倒についても、「東洋への嗜好が新しく芽ばえた理由のひとつは、同時代のダーウィニズムが成功を納めたことにある。まったく進化論に適合しないキリスト教は衰退した。この危機的な状況にあって、ヒンドゥー教や仏教の哲学は、個人が輪廻転生を繰り返すうちに進歩する可能性に開かれていて、進化論という新説に精神面で対応しているように見えたのだ」と書いている。

さらにナタリ氏は、セクトの危険性に言及し、「国別に見ても、多くの国の憲法は信教の自由を認めているが、それは“その実践が公共の秩序または良き習俗と矛盾”せず、“儀礼が道德性を妨げる”ことなく、またその自由が民主主義的な価値と齟齬をきたすことがない限りにおいてである。実際において、信教の自由は個人に限られていることもある」、「ヨーロッパの宗教状況は、他の地域に見られる現象と比べても、その特殊性は目立っている。すなわち、心性の世俗化、文化の多元化、統一をもたらす大きな思想体系の喪失、大きな宗教勢力の後退、信者数の顕著な減少、個人主義的な信仰の分散、規制緩和された象徴財の市場における宗教的小集団やネットワークの増加などである。ここに掲げた現象はすべて、西欧全体にみとめられる」と書いている。

4.「認知症の“真実”」 東田勉著 講談社現代新書 2014年11月20日

帯の言葉 : 「“認知症”は国と医者が作り上げた虚構の病だった！」

私は一昨年末に、小脳梗塞で倒れてから、医師の指示によりたくさんの薬を服用するようになった。高血圧、糖尿病、高脂血症、血液サラサラなどの薬である。もちろん食事療法と運動療法が大事だという指摘もあって、糖質

制限食を厳格に実施し、この半年、ほとんど米飯を食べていない。また毎日かかさず犬の散歩で1万歩をこなしている。犬の散歩といっても、わが家の犬は中型犬で、私のしつけが下手だったので、力任せに引っ張るし、突然走り出すし、よその犬とはケンカするので、結構、体力を使い、よい運動になっていると思っている。

加えて昨年夏から、とうとう歯がだめになり、インプラントにするため、歯医者通いを始めている。また昨年末、15年ほど前から、緑内障を疑われていた目が、少しぼんやりしてきので、久しぶりに眼科に行ったら、「このままでは失明します」と脅かされ、現在、2種類の目薬を毎日注している。挙げ句の果てに、先日、大雪の中、犬の散歩に行ったら、靴の中に雪が入ってきて、足の指が凍ったような感じになった。もともとしもやけができやすい体質だったので、放っておいたらだんだん固く、赤く、痛くなってきた。いつものしもやけとはちょっと違うと思ったので、糖尿病の合併症の壊疽ではないかと心配になり、かかりつけの糖尿病専門内科に診てもらった。「単なるしもやけです」ということで、一安心したが、ついでに皮膚科にも行ってみた。皮膚科の医師も「壊疽ではありません。しもやけです」という診断だったが、ビタミンE不足ということで、たくさん内服薬をもらい、塗り薬ももらった。こんな具合で、私は今、多くの時間を医者通いに費やしている。そして食台の上には、大量の薬が鎮座している。

果たしてこれらの薬が、本当に効果があるのか、私は半信半疑である。むしろこれらの副作用のせいか、最近、なんとなく元気がなくなり、やる気なくなってきたような気がする。それでも「合併症が出る。目が見えなくなる。足を切断することになる」などと言われると、律儀に薬を飲まざるを得ない。

私の実母は97歳であり、20年来のかかりつけの医師の指示で、7〜8種類の薬を飲み続けていたが、最近ではだんだんその薬が飲みづらくなってきていた。いろいろな都合があって病院を変わり、医師が変わったのを機会に、薬を減らしてもらうように頼んでみたところ、その医師は3種類にしてくれた。その結果、実母の状態は、以前よりもよくなっているように、私には見える。

妻も数年前から腰痛で、整形外科では脊柱管狭窄症という診断で、手術を勧められている。しかし最近、メディアなどでは「腰痛の大半はストレス」ということが言いはやされているので、妻も手術は最後の手段と考え、目下、毎日2時間、腰痛体操を行い、プールに通い、心を安寧に保つように努

力を続けている。

私はこの本に書いてあることが全て正しいとは思わないが、「痴呆症」という病気について、かなり医学会でも混乱があるように思われる。この本の、「ドクター・ハラスメント」、「だいたい薬が多すぎるんですよ」という言葉には、私もなかば同意せざるを得ない。なお、著者の東田氏は、「認知症は、標準治療とされるものがそもそも間違っているため、厚生労働省が推奨する“早期受診、早期診断、早期治療”のルールに乗ると、お年寄りがボロボロにされる可能性が少なくないのです」、「学会は、薬価の高い薬をなるべく多く処方させようとする教授達から洗脳を受ける場であり、製薬会社から寄付金を受けている限り正常な話にはならない。若い医師は、統計的有意という言葉に弱い。有意にするためにデータ偽装が3割で行われていることがアンケートでわかっている。したがって、論文が真実との仮定で運営されてきた学会も根底から信用性が失われている。また、学会が認定する専門医は、治すのがうまいという意味ではない」（コウノメソッド2014）、と書いている。

5. 「病気を治せない医者」 岡部哲郎著 光文社新書 2015年1月20日

副題：「現代医学の正体に迫る」

帯の言葉：「死ぬまで薬を飲み続けますか 真の医療を問う」

日経新聞の本の広告欄に、刺激的なタイトルの本書が出ていたので、さっそく買って読んでみた。著者の岡部氏は、「私は、縁あって西洋医学と中国伝統医学の両方を学ぶことができた」と書き、その視点から西洋医学一辺倒の現代日本社会を批判して、「中国伝統医学は、現代の医療状況の限界を突破するためにも、西洋医学の足りない部分を補うという意味でも、時代に求められている医療だと言えるだろう」と主張している。そして「残念なことだが、医療被害から逃れるためには、医療を受ける側もまた、医師を盲信しないで自らの病気の知識を深めて自己防衛するしかないと思う」と述べている。

岡部氏は、高血圧や糖尿病、高脂血症、脊柱管狭窄症、緑内障などの症例で、西洋医学の限界を具体的に示し、むしろ副作用が大きな災いをもたらしていると書いている。この指摘は、ほとんどが自分や周囲の人に当てはまるだけに、私は深く考え込まされた。しかも岡部氏は、高齢男性の多くが患う前立腺がんについて、その検査方法であるPSAについて、「高齢男性であれば、その多くの方に前立腺がんがあり、そのほとんどは生涯無症状のまま、まさか前立腺がんがあるとも知らず、一生を終える。そうなのだ。生涯無症状なら、前立腺がんとは診断されない方がよい。生涯無症状ならば、治療もし

ない方がよいに決まっている」と書いている。数年前、私は人間ドックの PSA 検査結果で、数値が極めて高く出たので、びっくりしてただちに泌尿器科の精密検査を受けた。最初の病院では、医師から「前立腺がんの疑いあり」と言われた。2 件目の病院でも同じ宣告だった。3 件目の病院では、医師から「私の今までみてきた症例から判断して、しばらく様子を見ても、問題ないと思う」との言葉をもらった。その後、1 年に 1 度、その医師に診てもらっているが、現状は「がんへの進行はなし」である。私の体験に照らし合わせ、岡部氏の主張は納得できるものである。

岡部氏は、「降圧剤や高脂血症薬など病気予防のための薬の開発は、病気のリスクはあるが健康な人が対象であるため、巨大なマーケットがあり、製薬会社にとっては莫大な利益が得られるドル箱ビジネスである。さらに、ワクチンビジネスは、対象者すべてが健康な人間であるため、最大の利益を得られる。そのため製薬会社、医学研究者、専門医集団、医療行政、政治家の利権が集中する」、「西洋医学の治療は、体を病気になる前の健康な状態に戻すのではなく、症状を抑え、死ぬまで薬を飲み続けていくことしかできない。実際、周知のように医療費は年々膨れ上がり、2013 年度は前年度比 2.2%増の 39 兆 3 千億円、11 年連続で過去最高を更新した」と書いている。医療の世界に生きている人たちが、国民の無知につけ込んで、国家財政を喰い物にし、日本国家に 1000 兆円超の借金を背負わせる一因となっているとしたら、それは「国家的詐欺行為」だと言わざるを得ない。

私の高校の同級生たちは優秀で、東大や京大の医学部に進学した人も多い。岡部氏も東大医学部入学組であり、その体験から、それらの人達を、「日本の最高峰と言われる東大の医学部を卒業した人達の人生の目的は何だろうか。その一つ目は、医学の世界で出世してその分野の最高位を究めること。たとえば医学部の教授、有名病院の部長などを目指すこと。二つ目は、専門分野で目覚ましい研究業績を上げて脚光を浴びること」と揶揄している。私は落ちこぼれ組だったので、高校卒業後、約 50 年間、彼らに劣等感を抱き続けてきた。しかし 70 歳近くになって、地元の同窓会などで、彼らの歩んだ人生結果を伝え聞き、そこにこのような岡部氏の指摘を重ね合わせ、やっと彼らと自分の人生を冷静に比較することができるようになった。私は引き続き、日本社会の未来のために、残りの人生を捧げるつもりである。

以上

上海街角インタビュー 64

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集团董事长（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

中国は世界第2位の経済大国、一般庶民は大国意識を持っているか？

中国はGDPで日本を抜き、米国に次ぐ経済大国になった。習近平国家主席は国際会議の場で「中国は大国である」ことを隠さなくなってきた。指導者が大国意識を強くするなかで、一般市民も「自分たちは大国の国民である」と意識し始めたのだろうか？

1. 40歳代中頃の女性

私は中国が真の大国になったとは思っていません。しかし、大国への道を歩んでいます。GDPが世界第2位になったといってもそれでは不十分です、中国は人口大国なので、世界第2位の経済力では一人当たりのGDPではアメリカに遥かに及ばず、経済大国ともとても言えません。世界の大国になるにはまだまだ時間がかかります。

2. 50歳代前半の男性

確かに大国意識は一部の国民の中には芽生えてきています。しかし、私は中国が大国になったとは思っていません。私はこの一部の大国意識をもった人達が世界中で中国の評判を落としていることが残念です。大国意識を持っているのは、生活の苦勞を知らない90年後世代、成金などです。労働者階級は生活が苦しく、大国意識など微塵ありません。習近平主席も見識が広い人ですから自国のことはよく分かっており、決して今の中国が米国と渡り合える大国だとは思っていないでしょう。大国のような振る舞いをしているのは国内向けのパフォーマンスで、政権固めのためでしょう。

3. 30歳代中頃の男性

阿倍仲麻呂が遣唐使となった時代の中国は大国でした。この時代の中国は一所懸命に自分の文化と技術を周りの国々へ教えようとしていました。自分の強さについて絶対的な自信があり、余裕たっぷりの政治でした。同時に他国を見

下すのではなく、他人のよいところも一生懸命勉強していました。阿倍仲麻呂は日本のトップクラスの人材で、中国では国家天文館館長や安南節度使を務めました。中国人も阿倍仲麻呂から多くを学んだと思います。今の中国は、アヘン戦争から没落の連続だった 100 年から立ち直りつつある途上です。ちょっと豊かになったからといって図に乗ってはいけません。真の大国とは周辺国から尊敬される国です。中国が唐の時代の余裕をもってはじめて大国に戻ったといえると思います。

4. 60 歳代の男性

アメリカにはまだ及ばないけれど、中国は紛れもなく大国です。国際政治の場では日本より地位は高いです。日本を小国とは言いません。日本も経済、技術面では大国です。

技術面では中国は日本に及びません。それでも総合力では中国の方が大国です。世界の見る目が日本より中国を重視しているのがその証拠です。私は日本嫌いじゃないですよ。私の息子は日本に留学していました。

5. 20 歳代前半の男性

中国が大国かどうかなど意識したことはありません。国のリーダーは他国と比較する前に、中国の中の格差を無くして欲しいです。上海の街中には高級車がいっぱい走っていますが、私は自転車を買うのがやっとです。大国でも小国でもどちらでもいいけれど、もっと給料が高い国にして欲しいです。

6. 20 歳代前半の女性

大国という定義がよくわかりませんが、生活を豊かにするという点ではアメリカ、カナダ、日本の方が上です。薬でも化粧品でも日本の方がいいものが多いです。私は母の友人の日本人によく買い物を頼みます。

7. 30 歳代中頃の男性

外交の場での発言権という意味では中国は大国です。文化面ではノーベル文学賞ももらっているからまあまあです。自然科学の面では中進国です。総合的に見れば大国になろうと頑張っている途上国です。

8. 20 歳代後半の女性

大国になったと言えるのではないですか。アメリカには及ばないと思います

が、大国に順番をつける必要はないでしょう。中国はアジアやアフリカの国々にいっぱい援助をしています。他国に援助を出せるということが大国の条件だと思います。日本もいっぱい援助していますか？ それじゃ、日本も大国です。中国と日本を比べる必要はないです。

9. 40 歳代前半の男性

残念ながら中国はまだ、追いつき追い越せの段階です。いろいろな面で大国とは言えません。私たちの世代で基盤を作り、子供たちの世代に余裕をもった大国になれるようにしなければなりません。10 年以内に経済力では世界一になれるのは確実です。その段階で一人当たり GDP も世界のトップ 10 になっておれば、間違いなく大国と言えます。

10. 50 歳代後半の男性

今、世界の超大国はアメリカだけです。あと、先進国か発展途上国かの差はあるけど、ほかに大国はありません。イタリアは高級車やブランドバッグを作る文化先進国だけど、経済は破綻している二流国です。日本は中国より技術的には進んでいるけれど、国際政治の世界では中国に差をつけられています。大国かどうかなど比べても仕方がないです。

国民が豊かになり、近隣諸国から尊敬されるようになれば、自分で言わなくてもまわりが、大国と言ってくれるでしょう。

私が関係する包装業界で、中国包装連合会は「中国は製紙大国であるが、強国ではない」とか、「中国は包装材料の生産量では大国であるが、技術的には強国ではない」といった表現がよく使われる。彼らは量だけで真の大国とは言えないことをよく承知しており、一日も早く欧米先進国に並びたいが、その差を詰めるのが容易でないことも理解している。

今回のインタビューからも中国の一般市民はきわめて冷静に中国の今を見ているように感じた。桜美林大学の川西教授は「1840 年（アヘン戦争）当時においても中国は世界最大の経済大国であり、世界の富の 24%を有していた。一方、当時のイギリスは中国の半分にも満たない 11%の経済力であった」と述べている（激動するアジアを往く 桜美林大学北東アジア総合研究所）。中国はかつて大国であった。今後数年～十数年後には再び真の大国に返り咲くだろう。中国は大国化し、東アジアの国々も力をつけてくるだろう。パラダイム変化は確実に起こっている。日本人がパラダイム変化に対応しなければならないのと同時に中国の一般市民も

大国意識を強く持つようになるだろう。そのとき中国は大国の風格を持って、世界平和に貢献していることを中国の一般市民の多くが望んでいると信じている。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増 加 率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
4 月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5 月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6 月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7 月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8 月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9 月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10 月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11 月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12 月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6								14.1
1 月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2 月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3 月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4 月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5 月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6 月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7 月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8 月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9 月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10 月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11 月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12 月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014 年												
1 月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2 月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3 月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4 月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5 月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6 月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7 月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8 月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9 月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11 月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12 月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による